
彼がストーカーになった理由

麻戸 槲來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼がストーカーになった理由

【Nコード】

N9757U

【作者名】

麻戸 槲來

【あらすじ】

最悪だ。馬鹿だ馬鹿だと思ってはいたが、あいつはやはり頭がおかしかったらしい。彼は純粹で、優しかった。だが、どうしようもないお人よし加減に嫌気がさして、とうとう別れを切り出した。なのに何故、あんたはそういう道を選ぶんだ。微妙な所ですが、一応警告タグをつけました。犯罪はいけません。

（前書き）

作者は、決してストーリーカーを容認している訳ではありません。
ですが話の都合上、不快に感じる方がいらっしゃったら申し訳ありません。

「ごめん、ごめんな…」

そう、ベッドに力なく横たわりながらも謝る男を、私は見ていた。半年前に感じていたようなときめきを、今は感じていなかった。実際、どうでもよかったのだ。

こんな男が死のうが生きようが。

私に関わらない場所で、勝手に朽ち果てればいいとまで考えていた。

しかし、人のマンションの屋上で自殺騒ぎを起こすなんて、どこまで自分勝手ではた迷惑な男なんだ。

それが嫌がらせ目的だというのならまだわかる。それなのにこの男
ときたら

「どうせもう会えないのなら、君の近くで死にたかったから」とぬかすのだ。

本当にやってられない。

最早、どうしてこんな男を好きだったのか分からない。
純粹で悪意がなければ許されるのか？

別れるといった途端、四六時中いつから謝罪とも懺悔ともつかない電話やメール

が来ていても？

何度番号を変えようとも、彼に同情した共通の友人から私の番号を聞き出して

イタチごっこもいいところだった。

お陰で、何人かの友人と疎遠になった。

家を待ち伏せされるのは可愛いほうで、渡していないはずの合鍵を使つてへやに

侵入された時には肝が冷えた。

「何故、あんたがカギを持っている」

と問えば、さも当たり前のように、作つたからという答えが返ってきた。

その時に確信した。

こいつは立派なストーカーになり下がつたのだと。

若干遅い気もしないでもないが、仮にも惚れた男がそんなものであると

信じたくないではないか。

おまけに、こいつは所詮守つてあげなくなる感じで、天然だなんてもてはやされて

いたからよけいに信じられなかった。

どうせ私もミーハー、整つた顔にやられたのか。

いや、本質は善良で悪い奴ではないのだ。

だが押しに弱く、振つた相手に「一回でいいから思い出を頂戴」と言われると

拒絶できないまま一夜を明かす事も珍しくなかった。

きつと気づいてなかったのだろう。

女たちが、「ウルウルおめめで同情をかえば、彼は相手してくれると」陰で噂され

ていた事も。「彼女では満足できなくて、実は楽しんでいるのではないかと」言われていた事も。

驚くことに、彼の最悪な部分はそれだけではない。

逐一、どこの誰と何時間一緒だったと私に報告してくるのだ。

正直本当に勘弁してほしい。

謝罪する事でそちらは気分が晴れるかもしれないが、聞かされるほうは堪ったものじゃない。

何処の世界に、彼氏の浮気事情を事細かに聞きたいと思う女がいる。

確かに、もう二度としないというのなら話はわかる。

けれど彼は「それは約束できないと」いうのだ。

抵抗はするものの、もしこれで最後だからと言われたら、可哀想で仕方がなくなる

そうだ。

こんな愚かな男、二年経ったところには我慢できず振ってやろうと思った。

優しさを履き違えたこんな男、女を不幸にするだけだ。

博愛主義者？笑わせるなど。

けれど、もつと愚かな私は彼を愛していたのだ。
もしかしたら、考えを改めてくれるのではないかと、そんなやり方は間違っている。
何度も言い聞かせた。
優しい彼が好きな私には「私にだけ優しくして」とも、「女はそれを狙っているのよ」ともいえなかった。

——そんな私も、ある日我慢の限界を迎えた。
普段は一回しか相手をしない彼が、数度同じ女と関係を持ったというのだ。

そもそも、彼女がいる時点でほかの女を相手しているのはおかしい。
だが、もつとおかしいのはこいつの頭だった。

彼女と別れられないのなら、身体だけの関係でもいいといった彼女を受け入れ
やがったのだ。「受け入れてくれなければ、自殺してやると」言ったら、簡単に
いう事を聞いたらしい。

これは、彼と別れてくれと言ってきた当事者から聞いた話のため、
確かだろう。

彼と関係を持った相手と直接話をしてみて、ようやく私は愛想が尽きた。

幸いにも彼を欲しいという人がいるのだから、ちょうどいいだろう。
三年目にして「もう好きじゃなくなったから、別れよう」と初めて

彼に言った。

此処までよく我慢したほうだろう。

むしろ、今まで耐えていたことを褒めてほしいくらいだ。

それにも関わらず、何をとち狂ったのかこいつは「もう、ほかの娘に優しく

なんてしないから別れるなんて言わないで」と懇願してきたのだ。

やっと解放されると思ったのに、そんなの冗談じゃない。

今度こそ普通の顔でも、誠実で私にだけ優しい王子様を見つけるのだ。

博愛主義を履き違えたエセ宗教家はいらない。

…それなのに、私の心が離れた途端に一筋になられても嬉しい訳がないだろう。

というか、こんなストーカー誰も喜ばない。

ストーカー自体迷惑でしかなのに、この男は本当にどこかが確信的に間違っている。

病院にだって、本当は来たくなかったのだ。

それなのに、一命を取り留めたこの男がうわごとのように私の名前を呼ぶから

親切な管理人さんに、見舞いに行くよう言われてしまった。

これであそこには、もう住めなくなってしまった。

本当に、この男は私を不幸にしかない。

うわ言のように「愛してる」とつぶやく彼を
立ったまま、私は何時までも見つめ続けていた。

（後書き）

だいぶ色は加えていますが、ごく一部箇所だけは本当です。
聞いた話にすぎないのですが、私にとつたらなかなかの衝撃でした。

ストーカーだけでなくセクハラさえも、本当に嫌悪の対象なので
不快に感じる方がいらっしやたら申し訳ないです。

願わくば、自分勝手だという事にすら気付いてない人に対する
皮肉の様なものだと感じてくだされば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9757u/>

彼がストーカーになった理由

2011年11月13日12時39分発行